に発生した台風4号の大雨、強風によりかなりの実が落ちてしまいました。

昨年は、気温が異常に高く、害虫が発生して全滅しましたが、一昨年は豊作。500人が農園に訪れるにぎわいをみせ、地域の活性化に一役かっています。

「はしゃぎながらサクランボ狩り」招待された園児たち

地域のジゲおこしになればと栽培

稲田さんとサクランボの出会いは、老後の楽しみに何か新しいことに挑戦したいと考えていたころ、東北地方の旅行先で偶然サクランボを食べ、その味に引かれました。

「町の特産品になり、地域のジゲおこしにつながれば」と周辺地方にはなく希少価値の高いサクランボを町内で育てたいと約13年前年から栽培を始めました。

サクランボは、標高が高く温度差が大きい寒い所を好むということで、久住地区に農園の場所を決めました。

多くの人に支えられここまでこれた

最初は、山形県でサクランボ園を経営する大沼満幸さんから、苗木を譲り受け植えましたが、排水不良や害虫発生で、うまく育たず全部枯れてしまいました。

その後、県農業改良普及所で果樹普及員をしていた横山正夫さん（岸本町）が、栽培に参加。山陰地方は、高温多湿と雨が多く、サクランボの栽培には不向きと言われていますが、果樹栽培の知識を応用するとともに、山形県に何度も通って勉強したり、技術支援を受けながら今日まで栽培に取り組んできました。

稲田さんは「山形県の大沼さん、横山さんはもとより、久住の皆様をはじめ多くの人々に支えられながら、ここまで実をつけるようになりました。心から感謝しています」と周囲の支えがあってここまでこれたと話します。

日ごろの管理が欠かせない

安定して実をつけ特産品にしたい

冬の時期を除けば、ほとんど農園に通い、サクランボの世話をしている稲田さん。園内を回るのが日課で「木を見たら状態が分かるようになりました。愛着がわき、かわいいものです」と一本一本に声をかけ、変化があるとすぐに記録し、翌年に生かします。

「農業経験なしで、植えれば実がなる程度の考えだった」と栽培を始めた当時を振り返り「失敗してあきらめていたら前には進めない。がんばれば必ず成功する。このことは、サクランボづくり以外にも言えること」と話し、今後の夢は「安定して実をつける技術を身につけたい。そして、町の特産品になればうれしいです。もうすぐ80歳、体力が続く限りがんばりたい」と抱負を語りました。

愛情を込めてせん定する経営者の稲田さん